

<Notes> Thorstein Veblen's Conspicuous Consumption and Approaches based on His Theory of Instincts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 成 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1088

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



資料紹介

ヴェブレンの衒示的消費と独自の本能論に基づくアプローチについて

Thorstein Veblen's Conspicuous Consumption and Approaches based on His Theory of Instincts

内 田 成

UCHIDA, Minoru

1. はじめに

制度が経済学研究において重視されるようになって久しいが、制度派経済学に関しても多様な解釈が存在するようになってきている。本稿では制度派経済学の創始者であるソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) の経済学を特徴づけている本能論についてフェリペ・アルメイダの「初期制度派経済学の心理学：ソースタイン・ヴェブレンの衒示的消費論の本能的アプローチ」を採り上げ、特に衒示的消費論と本能論の関連についてみてゆく¹⁾。

2. ヴェブレン経済学と本能、思考習慣の関係について

フェリペが指摘しているように、ヴェブレンの処女作『有閑階級の理論』(1899)²⁾は、進化論的な視点から、いかに制度が人々行動に影響を与えるのかを心理学的、社会的および経済的な視点から取り扱っている。『有閑階級の理論』やその後の著作において思考習慣、制度および社会における人々の行動に焦点をおいている。ヴェブレンの処女作は経済学のその他の領域において制度についての研究を急増させた。このアプローチは後に制度派経済学と呼ばれるようになった。現在、ヴェブレンの流れを汲む研究は「旧制度派経済学」あるいは「オリジナルの」制度派経済学と呼ばれている³⁾。

ヴェブレンの理論における心理学的インサイトはアメリカのプラグマティズムの哲学に拠っている。衒示的消費者の心理学を説明する研究においては、意思決定における習慣が中核的な役割を演じている。

実際、習慣はヴェブレンの理論において主要な要素であるといえるが、フェリペによれば、ヴェブレンの衒示的消費者アプローチにおいて、習慣は重要ではあるが、もうひとつの重要な心理学的要素がある。それは本能の役割である。したがってフェリペは、これまであまり研究されてきていないと考える本能を分析しようとしている⁴⁾。

本能は科学的アプローチにおけるひとつの共通の概念である。生物学、人類学、社会学、心理学、哲学および経済学でさえ本能の観念を扱っている。18世紀の間に心理学は次第に整えられ、科学の一分野として認知されるようになったが、それは本能のようないくつかの意思決定概念の発展に影響を与え始めた。ヴェブレンの本能の定義は哲学的ならびに心理学的概念と比べると独自性を持つものと考えられ、その独自性はこれまでの制度派経済学に関する研究においては、あまり問題とされてきていない。したがってヴェブレンの本能概念と衒示的消費者の意思決定における本能の位置づけを明らかにすることは、ヴェブレンの制度派経済学のみならず衒示的消費者の意思決定を十分に理解することに役立つとフェリペは考えている⁵⁾。

2. 本能と衝動—目的との関連

フェリペによれば、ヴェブレンの著作は、これまで広く研究され分析されてきているが、それらの多くは制度派経済学や方法論の問題への影響との関連で検討を加えている⁶⁾。また制度派経済学に関する

キーワード：ソースタイン・ヴェブレン、本能、衒示的消費、有閑階級
Key words : Thorstein Veblen, instincts, conspicuous consumption, leisure class

ヴェブレンの視点や社会的領域に対するダーウィニズムに対する仮説形成も考慮に入れている。方法論に関しては二つのトピックスが強調されている。それは進化論的アプローチと社会的領域に対するダーウィニズムの仮説形成である。衝動的消費者の意思決定に関するヴェブレンの視点は思考と行動の進化における習慣および制度の役割と結びついている。

実際、ヴェブレンの制度主義は習慣、制度およびそれらの関連に関する進化論的アプローチで良く知られている。それらは彼の分析における非常に重要な要素である。しかしながら、ヴェブレンの意思決定に対するもうひとつの側面である本能の概念はさらに探求されるべきであるし、本能に対するヴェブレンのアプローチを理解することは重要である。というもの、本能についてのヴェブレンの視点が比類のないものであるからである。さらに、その本能的アプローチを検討することは、彼の制度派経済学および衝動的消費者の意思決定をより良い理解するためにも役立つものである⁷⁾。ここで注意すべきことは、ヴェブレンの本能概念と哲学者、心理学者および一般的な意味で理解されている本能概念との間には差異がある、ということである。後者のグループにとって本能は行動するための推進力である。それは意思決定者の内部から生ずるものであり、純粋に内在する力である。しかしヴェブレンにとって本能は行動するための純粋な内在的な力ではない。ヴェブレンは一般的な本能の概念を展開していない、いえる。それゆえにフェリペは、「本能」という用語をヴェブレンの本能に言及するために使い、哲学および心理学的な通常概念を「内的衝動」と呼んでいる⁸⁾。このフェリペの指摘は重要である。

ヴェブレンにとって、人間行動のもっとも重要な表現は道徳とは無関係な内的な衝動と生まれながらにして所与のスキルの発展とによって条件づけられる。意思決定枠組みと行動の発展は習慣と制度によって助長されるが、フェリペは内的衝動をヴェブレンの本能概念を分析するために考慮に入れている。内的衝動は行動するための動機である。それは衝動的消費者が習慣と制度の内容を処理することを学ぶ以前にさえ生じている。したがって、内的衝動は行

動を起こすための動機ではない。それは外的刺激から生ずるのではなく、意思決定者の内部から生ずるものである。そこでフェリペは哲学および心理学的概念とヴェブレン主義の本能の概念の間の対比を明白にするために、ヴェブレンの時代の著名な心理学者ジグムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) の内的衝動の概念を説明している。⁹⁾

フロイトによれば、内的衝動は非常に複合的な概念であり、有機体の内部で発生する精神的刺激として理解できる。内的刺激は一定のインパクトをもつ力であり、逃れることができない。行動に対するプレッシャーはそれぞれの内的刺激に共通であり、内的刺激が存在することの理由でもある。意思決定者の欲望が内的刺激に反応するものは、快楽と苦痛を通じて確立される。内的衝動の結果は快楽を追及する行動である。内的な衝動は探求を動機づけるが、満足を保証するわけではない。

内的刺激のゴールは常に明確である。それは主として、食物、水および保護から構成されている。内的刺激とその目的は変化しない。変化しうるのは、いかにこれらの目標が達成されるかである。

それらの修正は刺激ということがらではなく、目標達成のための手段に関するものである。たとえば、食べることに對する内的刺激は存在するが、人々は内的刺激によってのみ導かれるわけではなく、むしろ人々は規範に従って食事をする。食事は一日を通じて配分されている。それぞれの食事は必要な栄養素の消費に基づいて分割される。特定のタイプの食品は避けられる。というのも、それらは非健康的と考えられるからである。あるいは、あるタイプの食物は特定の儀式においてのみ食べられるからである。内的刺激は外界との相互作用を通じて実践される。特に食べることに對する内的刺激とそれに対応する対象物、すなわち、食品のような外界の目的物である。人々がどのように外界の対象物を取り扱うかは、人によって異なる。

発展途上国では内的刺激と対象物との間の関連は大抵必要最低限の生活の問題である。先進国では、その関連は生活の質と関連している。動機は別にしても、文化的学習が存在する。ヴェブレンによれば、財の獲得を仲介する社交性 (sociability) は制度と

その進化で表現される⁹⁾。その観点から、進化は改善ではなく累積的な修正を意味する。ヴェブレンが述べているように、進化は社会は習慣の自然の結果である制度の体系である。習慣と制度は、ヴェブレンが述べているように、いかに財および思考の一般的な使用が社会的環境において生ずるかを助長する。この観点から、制度は習慣と秩序の表現として理解できる。食事の品揃えやドレスコードは制度の一例である。

習慣は反復を通じて形成される。それらはそれ以前の活動によって影響を受けるし、持続し、自立した性質である。習慣は思想も行動も意味しない。むしろ、それは特定の状況で特定の方法で考え行動する傾向である。また、それは特定の内的刺激-財の関連において完結する。習慣は、たとえ表明されなくても存在するので、それらは長期間休眠中でありうる。習慣は潜在的な思考および行動であるが、適切な刺激あるいは文脈によって始動する¹⁰⁾。

ヴェブレンは思考習慣および行動に対するその重要性に焦点を合わせている。現代社会は歴史的に確立された思考習慣の体系をもっている。その理論の中心の問題は社交性が内的刺激と財の関連の確立の仲介をしている、ということである。ヴェブレンにとって、新しい状況は以前に生じた状況のヴァリエーションである。標準の変化は漸次的であり、新しい標準がかつて受け入れられていた以前のものに完全にとってかわることはほとんどない。それは累積的な制度的変化のプロセスであり、この累積なプロセスが内的衝動と財との関連の構築を手助けする。

ヴェブレンの理論では、内的衝動と財との関連において本能が重要な役割を演じている。ヴェブレンの本能が内的な衝動と異なっているのは、この理由からである。本能として内的衝動と財の関連を説明しようとするヴェブレンの意図は、衝動的消費者が内的衝動として作用する衝動を認めているという事実と結びついている。さらに、ヴェブレンは特定の種類の本能を強調している。それは衝動的消費者を行動させる動機であり、すなわち、製作本能 (the instinct of workmanship) である。さらにヴェブレンは衝動的消費者の製作本能、すなわち、有閑階級を作り上げる制度を強調した¹¹⁾。

3. 有閑階級、製作本能および制度的に発展する快楽

すでにみたように、ヴェブレンは発展した社会の一部であり、習慣および関連した制度において表現される累積的なプロセスが存在することを強調している。それゆえに、社会の歴史性は、その制度において表現される。ヴェブレンは内的衝動と財の関連の確立のために極めて重要なものとして、特定のタイプの制度を強調した。それは上層の社会経済的階級としての有閑階級である。ヴェブレンによれば有閑階級は近代社会のもっとも発達した形態において見出すことができる。そこでは階級間の区別は明らかに職業の違いの結果とみることができる。この社会の上層階級は慣習的に産業的職業から免除あるいは除外されている。そして、その代わりに、ある程度の名誉を伴うある特定の職業に排他的に用いられる。社会的地位は上層階級の一部、すなわち有閑階級に本質的なものと見做されている。有閑階級の職務、立場や対象物は次第に社会的地位の強力な標示となってくる¹²⁾。

有閑階級の制度は価値あるものとそうではないものとの間の区別の結果である。ヴェブレンにとって、文化の進化が有閑階級を生んだが、それは同時に財の私有財産権の始まりでもあった。重要なポイントは、有閑階級と財の所有権が同時に出現した、ということである。両者は、すぐれた能力を誇示したいという成功した人々の欲望から生じている。それゆえに財の所有権は財産あるいは個人的消費についてだけではなく、これらの財の使用をはっきりと示すという因襲の問題でもある。

この考え方と密接に結びついて、財産のシステムが漸次的に組み込まれてゆく。ヴェブレンにとって、私有財産の存在するところでは人々は財の所有によって区別される。そして、これが富を社会的に誇示するため効率的な方法となってくる。ヴェブレンは、ほとんどすべての財が私有財産である社会では、生活必需品はより貧困な階級にとっては強力で絶えざる誘因である、ということを強調した。私有財産が広く行われるようになるや否や見栄が行動にとってのカギとなる。したがって、社会的淘汰が有閑階級の生活様式と見栄を張る能力に基づいて生ずる。

ヴェブレンにとって、有閑階級は社会的に競争的

な消費の論理およびその進化の因襲性を規定する。有閑階級によって仲介される社会的に競争的な消費の論理を強調することで、消費に対するアプローチは衞示性という特徴に依存している。衞示的消費は社会的尊敬によって動機づけられる浪費的な貨幣的支出として理解することができる。衞示的消費者は財を社会的地位のために購買している。それは具体的で、目的的な方法で有閑階級の財を購入することで有閑階級の行動と張り合うことで表現される。ヴェブレンの観点では、社会化を通じて、それらの財と関連した制度化されたプロセスは人々に、実質的な目的を満たすためにいかに彼らが内的衝動を処理すればよいのかを教えてくれる。このプロセスは見栄の論理に従う内的衝動と財の関連において完結する。

ヴェブレンは極めて重要ないくつかの本能を強調した。衞示的消費者の場合において、ヴェブレンは製作本能を強調した。ヴェブレンの分析においてこの概念を非常に頻繁に使ったにもかかわらず、明確には定義されていないがヴェブレンは「淘汰的な必然性のことがらとして男性は能動者である。彼は、彼自身の理解において、展開しつつある衝動的活動一つつまり『目的的』活動—の中心である。彼は、あらゆる活動において、何らかの具体的、目的的、非人間的目的の達成を求める主体者である。そのような主体者であるという力によって、彼は効果的な仕事に対する好みと不毛な努力に対する嫌悪を持っている。彼は有用性を価値あるものとする感覚を持っている。この傾向あるいは性向は製作本能と呼ぶことができる」¹³⁾と述べている。

この製作本能の定義は、社会における生活体系の出現に対する有閑階級の重要性という『有閑階級の理論』の分析の主題に基づいている。それゆえに、製作本能についての次のようにも述べている。「その種の物的福祉、それゆえにその生物的成功に直接的に助けとなる本能的傾向の中で主要なものは、ここで、おそらく製作の感覚として語られる」¹⁴⁾。

この定義によれば、製作本能が内的衝動の傾向と直接関連しているということを容認することはできる。この本能の強制力は財によって与えられる物的福祉によって充足される。Cordesによれば、ヴェブ

レンの製作本能は活動に目的を与える財の見栄の利用に向かう生活を導く人間の一般的な特徴である。製作本能は行動するための最も重要な動機の一つであるが、いくつもの衝動や多くのレベルでの本能的性質を代表している。このことがヴェブレンの本能としての製作本能はそれ自体ひとつの本能としてみることができない、ということを示している。

フェリベによれば、AlmeidaやCordesらは、内的な属性とは異なるものとして製作本能の概念化を強調している。彼らは、製作本能の意思決定のための行動的帰結が内的衝動の行動的帰結と同一のものである、と強調している。それゆえに、製作本能とその他のヴェブレンの本能は外界の習慣と制度との関係において理解することができる。それは内的衝動として働くように衞示的消費者の意思決定によって深く内在化されるようになる¹⁵⁾。

製作本能は目的を定める。つまり、物的目的を満足のゆくように達成するための財の効率的で競争的な利用である。したがって、さらに製作本能を競争的論理におけるあらゆるその他の習慣の手順をサポートする基本的な種類の習慣として解釈することを可能にする。換言すれば、製作本能はメタ習慣として理解することができるし、習慣のプロセスの連鎖として理解することができる。製作本能は衞示的消費者の意思決定に深く位置づけられ、見栄的財の獲得にとって中核的なものとなる。

製作本能によって助長される見栄的財の獲得に基づく社会的淘汰において、ヴェブレンの説明は、財の階層体系を前提としており、この体系は、財の社会的地位の内容に依存している。消費者の行動間の比較を可能にするためには財の体系の確立が必要である。社会的地位の持つ意味に従うこの財の体系は、ヴェブレンの理論では、物理的な結果ではなく、制度的な帰結であることが暗示されている。さらに、高い社会的地位をもつ財の消費を通じて満足達成することができない場合、つまり財を通じての見栄的誇示が失敗した場合には不満足が生ずる。この論理によって、満足と不満足は見栄的理由づけによって確立されることが分かる。ヴェブレンの衞示的消費は、社会のその他の構成員に富を誇示するために財にお金を支出することを意味している。しかしな

がら、そのような財は内的衝動それ自体の満足に直接関連しているわけではない。満足は社会的尊敬という推進力によって得られる。Shipmanはヴェブレンの衞示的消費を「嗜好」にもかかわらず、財の「浪費」への衝動という点を強調している。Ramstadも指摘しているように浪費への衝動は有閑階級の制度を通じての社会的学習を含むものとして嗜好を理解することができる¹⁶⁾。

浪費と嗜好の二分法は、ヴェブレンの理論において、不満足は非生理学的あり、精神的な現象である。内的衝動は見栄の論理を規範とする制度化された習慣にしたがった財に対する関係によって充足される。この関係が満たされない場合には内的衝動と財の良好な関連の結果として生じる満足の代わりに不満足を生み出すが、このプロセスは複雑である。というのも、内的衝動の充足は常に生理学的満足であるからである。たとえば、ある人が空腹あるいは寒さを感じている場合、食事あるいはジャケットが、それぞれ満足を生む。制度的不満足が生じる場合、内的衝動の結果としての満足と財の見栄的獲得の失敗としての不満足の感覚という双方が経験される。したがって、制度的不満足の状況では、不満足の動機となる力は充足という満足よりも強くなるはずである。これは内的衝動と結びついた財のもつ社会的地位の内容に依存している。

ヴェブレンの衞示的消費者は食事やジャケットを提示された場合には、空腹や寒さを感じないが、それらのいずれにも満足を感じない。満足が制度化された見栄の論理によって決められている場合、物的満足は同時に制度的不満足を感じることになる。後者が消費者が馴染んでいる制度化された見栄的行動のパターンのもとで作用することは不可能である。以前に確立され、深く内在化している習慣によって行動することが不可能な場合、社会的に習得された社会的地位はもはや意思決定の一部を形成することはできない。消費すべき財として理解されたものと現実に獲得されたもの間のこの不釣り合いな組み合わせは制度的不満足の源泉となる。それは社会的な見栄の論理において提示された財の欠如である。この財がなければ習慣は充足されないまま残る。

したがって、制度的満足のふたつの可能な表現を

示すことが可能である。第一は、消費者が製作本能を発展させた場合に生じる。そのような不満足の表現は内的衝動と財の関連の大部分が十分に確立する前に生じる。この点において、見栄は特定の内的衝動と財の関連の価値を確信させることと類似している。大部分の意思決定は消費者の制度との相互作用を通じて習得される。若者は教えられる代わりに確信しやすい。というのも、彼らの製作本能は未だに十分に確立されていないからである。この点において制度の抑圧の特徴がより明らかになる。この論理が、見栄の方法で財に対する関連を生み出すようにすべての内的衝動を作り上げている。このプロセスは財に対する満足で終わる明確な方法を与える社会的に確立された差異や比較に依存して生じる。この種の制度的不満足は制度、習慣および製作本能の作用に関する知識の欠如を通じて生じるが、制度的不満足の習慣的な表現ではない、とフェリベはいう¹⁷⁾。

その他の制度的不満足の表現は制度および習慣の遂行を含んでいる。製作本能は衞示的消費者の行動の論理を規定している。それは行動あるいは思考の方法だけではなく、行動それ自体を規定している。行動は製作本能や習慣に含まれる傾向を実践に移すことを要求する。これらの活動は習慣的行動や制度化されたプロセスによって社会的に表現される。したがって、この不満足の可能性は制度の儀式と関連している。衞示的消費、すなわち有閑階級によって影響を受ける人々の財の浪費としての表現は、儀式的消費の特徴に関する制度の影響の結果として生ずるものである。財のもっている儀式的特徴は物理的側面を超えている。それらは制度的に創造されているからである。社会化を通じて、消費者は異なった種類の財について学び、その方法は製作本能に関連しているし、それらに対するその他の習慣は社会的地位の効果で完結する。そして、衞示的消費は内的衝動の充足に関連している。ヴェブレンが強調しているように、財は儀式的と道具的という二つの側面をもっている。財の儀式的側面は時代とともに増大する。このことは、社会内部における財の進化が内的衝動の変化とともに生じていることを暗示している。

ヴェブレンの考えでは、衞示的消費者にとって、

満足は財による人々の成功した社会的地位の誇示から生ずる。ヴェブレンにとって、それらの財の獲得は衝動的消費者の行動を強力に導くし、それ自体が行動に対する衝動の源泉となる。さらにヴェブレンは、活動への意思決定を動機づける内的な強制力が存在すると考えていた。しかしながら、この内的な強制力は外界の財や周囲の習慣および制度と強く結びついている。衝動的消費の帰結は内的な衝動が充足されても、その人は充足されないかもしれない、ということである。これは見栄的行動が不満足を生んだ場合に生じる。この観点からみると、不満足は製作本能および意思決定における有閑階級の習慣や制度から生ずる¹⁸⁾。

4. フェリベの所説の要約および問題点

これまで見てきたように、フェリベの所説はヴェブレンの衝動的消費者をその本能的アプローチを中心に考察している。まず、ヴェブレンの本能概念が心理学的な本能、つまり内的な衝動の概念とは異なる、ということを強調している。ヴェブレンにとって、内的衝動は外界の対象物と関連している。つまり衝動的消費者に関して言えば、それは財である。それゆえに、外界の制度はヴェブレンが「本能」と呼んだものにとって原因となる。ヴェブレンの立場から本能は、製作本能のように意思決定者に深く内在化されている習慣として理解できる、とフェリベは指摘する。

また製作本能は、その組織にとって原因となり、物的目的にとって内的衝動を与える。それゆえに製作本能の目的は、財の所有を通じての物的満足である。したがって衝動的消費者の満足と不満足は有閑階級のおよびその見栄的論理の存在の結果である。衝動的消費者は有閑階級の制度によって定められているように行動することができれば満足が達成されるが、見栄的論理の失敗は不満足を意味する¹⁹⁾。

フェリベの所説において重要なことは、ヴェブレンの本能概念が心理学的なものとは異なっている点を明白にしていることである。しかし、製作本能の位置づけの把握においては問題があるといえる。『製作本能論』において、ヴェブレンは本能が人間行動の原動力であると述べ重視し、本能が目的を持つも

のと述べているが、製作本能について「この目的論的活動の複合体における製作本能の地位はかなり特異である。・・ある意味では、その他のすべての本能に対して補助的なものである、と述べている²⁰⁾。この点をどう捉えるのか。また、『製作本能論』の原稿の完成後、ミッチェルへの手紙の中で「『製作本能論』—このタイトルは気に入らないが、これにとって代わるものが見つからない—は殆ど書き終えた」といっている²¹⁾。つまり、ヴェブレンも心理学の発達に十分気づいており、それほど本能という用語に固執していなかったのではないか。さらに製作本能を含む本能論全体の持つ二つに意味に全く言及していない。ひとつは伝統的経済学を受動的な人間観に対する能動的人間観の基礎となっている点、もうひとつには能動的な人間が所与の環境への適応において習慣（制度）を作り出すという点である。しかし、フェリベの所説は、衝動的消費論と本能論という限定された研究対象領域に焦点を絞り、その点からヴェブレンの制度派経済学の再検討を試みており、その点においては評価すべきものであり、価値のあるものといえよう。

注

- 1) Felipe Almeida, “The Psychology of early institutional economics : The instinctive approach of Thorstein Veblen's conspicuous consumer theory”, *Economia* 16 (2015), pp.226-234.
- 2) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class : Economic Study of Institutions* (New York : The Macmillan Company, 1899).
- 3) ヴェブレンやコモンス、ミッチェルらの制度派経済学の呼称については近年変化してきている。従来は第二次世界大戦前後で旧制度派経済学と新制度派経済学と分けていたが、1980年ごろから、新制度派を名乗る一群が出現した。彼らはNew Institutional Economicsであるが、これに対して新制度派という呼称をつけたので混乱が生じているようにおもわれる。
- 4) Felipe, *op.cit.*, p.227.
- 5) *Ibid.*, p.227.
- 6) ここでフェリベはHodgson, Mayhew, PeukertおよびRutherfordらの研究成果を挙げている。(Felipe, *Ibid.*, p.234)。

- 7) *Ibid.*, pp.227-228.
- 8) *Ibid.*, p.228.
- 9) *Ibid.*, pp.228-289.
- 9) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class : An Economic Study of Institutions* (New York: Augustus M.Kelly, Bookseller, 1975), p.334.
ヴェブレン著、小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店、昭和50年20日第13刷、311～312ページ。
- 10) Felipe, *op.cit.*, pp.229-230.
- 11) *Ibid.*, p.230.『有閑階級の理論』と後の『製作本能論』における製作本能に関しては、ヴェブレンにおいて、その位置づけに若干の変化があるが、その点については、最後に触れることにする。
- 12) ヴェブレンは「上層階級は慣習によって生産的職業から免除あるいは除外され、ある程度の名誉を伴う特定の職業のために留保されている。…有閑階級は非生産的であるという共通の経済的特徴を持っている。これらの非生産的上層階級の職業は、おおよそ、政治、戦争、宗教儀式およびスポーツで構成されている」と述べている。(Veblen, *op.cit.*, pp.1-2. 小原敬士訳、上掲書、9～10ページ)。
- 13) Veblen, *Ibid.*, p.15.小原敬士訳、23ページ。
- 14) Thorstein Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* (New York: Augustus M. Kelly, Bookseller, 1964), p.25. 松尾博訳『ヴェブレン 経済文明論－職人技本能と産業技術の発展－』ミネルヴァ書房、1997年11月5日初版第1刷発行、22ページ。
- 15) Felipe, *op.cit.*, p.231.
- 16) *Ibid.*, p.232.
- 17) *Ibid.*, p.232.
- 18) *Ibid.*, pp.232-233.
- 19) *Ibid.*, 233.
- 20) Veblen, *Instinct of Workmanship*, p.31p. 松尾訳、26ページ。
- 21) Veblen, *Ibid.*, ix.